特集　傘・雨・子ども

「六月は雨量では一年の中で（東京の場合）九月（平均191mb）に次いで二番目（平均181mb・十月も同じ）。雨の降る日数では一番。正確に言えば、六月中旬から七月中旬に、雨の日が多い。六月前半は晴れて気温の上がる日が多く、割合過ごしやすい。」（お天気相談所）

多くの人々が自然の営みの中で作物を作っていた頃、六月の雨は有難い雨であり、降り過ぎても困る雨であった。天に祈り、知恵を巡らす雨であり、積極的につきあう雨であった。子どもにとっても、同様であったろう。

傘は、いつの頃から、雨の日のものとして一般化したのだろう。子ども達が、母親の蛇の目傘の中から出て、自分専用の傘をさしはじめたのはいつの頃からなのだろう。

六月の雨に、いろいろと考えてみたい。

。。。傘・雨。。。

絵画にみる傘　――十七世紀オランダの場合――

堤　委子

傘をさす女性の姿は絵の中にしばしば登場する。しかし西洋美術に限るならばその歴史はさほど古くない。一説にオリエントから伝った傘が古代ギリシャ・ローマで用いられたが、その後跡絶え、十七世紀末から十八世紀にかけて流行したのにともなってその頃の風俗描写に頻繁に登場しだすのである。

ところが、気をつけてみるとそれ以前に傘を描いた例がぽつぽつと特にオランダ絵画の中に見出される。しかも、それらは主に聖書や神話に取材したあるいくつかの場面に見られるという点で興味深い。以下その代表的作例を紹介しよう。

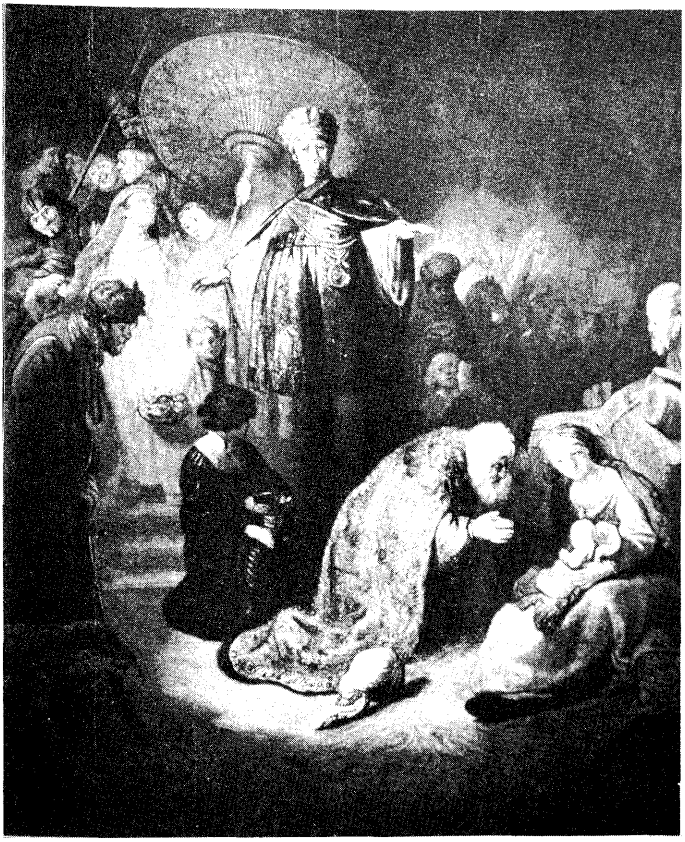
「リベカとエリエゼル」、「リベカの出発」等に傘が描かれている例がある。これは旧約聖書（創世紀24章）に由来する。エリエゼルは主人アブラハムの子イサクの花嫁を探し求める旅に出る。旅中エリエゼルが水瓶の水を土地の娘に求めたところ、娘が旅人の駱駝たちにまで水を分け与えたため、その娘リベカこそ求める花嫁と、連れ帰ったという内容である。たとえばレンブラント（一六〇六―六九）による美しい素描があり、そこでは大きく開いた傘の下、鞍を着けた駱駝が脚を折って出発を待つ傍で、花嫁衣装に身を包んだリベカが家族に別れを告げている。

同じく旧約の場面でモーセを描いたものにもしばしば傘が登場する。ナイル河に流された赤子のモーセをエジプト国王女が救出する「モーセ発見」、成人したモーセが兄と共に同胞の不幸を国王に訴える「パロの前のモーセとアーロン」等である。たいていは国王や王女に召使いが傘をさしかけている姿で描かれる。

新約聖書では「東方三博士の礼拝」に傘が描かれることが多い。イエス生誕のお告げを受けて東方

より三人の博士がベツレヘムに到着する。コニンクやレンブラントによる作例（図1）があり、いずれも博士の一人に大きく傘がさしかけられている。

他にはエチオピアの宦官の洗礼を描いた「宦官の洗礼」（使徒行伝8章）、ギリシャ神話に取材した



（図　1）
レンブラント「東方三博士の礼拝」
ストックホルム、イェーテボリ美術館

「エウロパの誘拐」、「オデュッセウスとナウシカー」等に傘が現われる例がある。

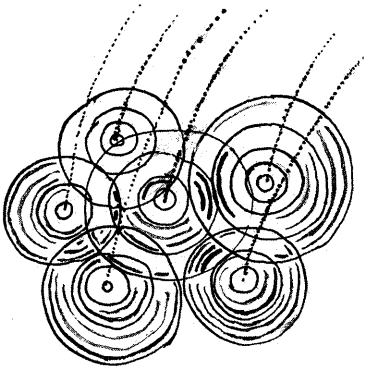
これらの作品中では、小さく描かれていて判断できない場合を除くと、傘はほとんど常に身分の高い人によって用いられている。これは、自らは傘を持たず、従者がさしかけているという表現からも明らかである。また、雨天ではなく、太陽の下、時に星空の下で用いられ、駱駝やターバン姿の人物と共に描かれることも多い。舞台はナホルの町であったり、エジプトやエチオピアであったりである。つまり傘は遠方の地の地位ある人の持ち物として表現されているといえよう。

ところで、当時の風俗画にも少し例が見られる。縁日等に店を出しては、いんちきな薬を売ったり、いいかげんな治療を施したりするクワックと呼ばれるいかさま師を描いた中に傘が見られる。大きく開かれた傘は人目をひき、その下の薬や治療の効果をもっともらしくみせたのであろうか。

これらの傘は、主にラストマン（一五八三―一六三三）、レンブラントとその弟子たち等によって描かれている。歴史画の第一人者ラストマンにレンブラントはこのモチーフを学んだらしい。彼ら二人の画面には、骨数が多く表面に細かく波打つ、今日我々が唐傘、和傘などと総称する型が認められる。当時のオランダには東西貿易によって世界の産物が集まったから、この東洋の傘を目にする機会もあったであろう。実際、彼らは聖書や神話の世界をできるだけ正確に再現しようと、手に入る異国の衣装や小物類を利用していたのである。

ところで、傘をさす習慣は西欧人の興味をひいたらしく、マテオ・リッチの「中国キリスト布教」、アントニオ・デ・モルガの「フィリピン諸島誌」、ルイス・フロイスの「日欧文化比較」等の旅行記にそれについての記述が見られる。植民地の西欧人もすぐ採用し、リンスホーテンが「東方案内

記」にその様子を挿絵入りで紹介している。余談ながら、従者に傘を持たせ、得意気なそのさまは、我国の南蛮屏風にも見ることができる。また、前述のラストマンらに影響を与えたエルスハイマー（一五七九―一六一〇）も傘をさすアジアの風俗を版画化している。これら一連の記述および造形表現がヒントとなって、傘が新しく画面に登場したと思われる。

以上、オランダ絵画中の傘について概観したが、特定主題の下での表現は傘そのものが実用化されるにつれ、一応の終りをみる。十八世紀に入っては、中国趣味の絵皿や壺や調度品の装飾の中に、傘をさす東洋人として、西ヨーロッパ中に広まる。それはともかく、十七世紀オランダ絵画の中で傘は権威を象徴する異国風物であった。今日の手軽な実用品も、かつて聖書や神話の主人公の頭上を飾る大役を得て、美術史の一こまに忘れ難い姿をとどめることになったのである。

（お茶の水女子大学）